

日本語教師養成講座の受講者が行う類義語の言語特徴分析

—類義語の特徴説明に見られる傾向と問題点—

坂 口 和 寛

キーワード：類義語分析，言語特徴分析，日本語教師養成講座，被養成者，ストラテジートレーニング

1. 問題の所在

外国人日本語学習者への日本語教育においては言語的側面に焦点化した指導が不可欠であり，そのなかでも類義語は重要な位置を占める言語項目の一つである。姫野（1998）によれば，学習者が混乱せぬよう「類義表現の使い分け」をうまく処理することが，日本語教師の「腕の見せどころ」である。日本語教師（以下，教師）は，類義関係にある複数の語や表現形式について，それらの弁別的な特徴を正確かつ明確に説明し，学習者の理解を促すことができねばならない。そのために教師は，辞書や参考書などを利用して類義語の共通点や相違点を整理し，弁別の特徴を把握しようとする。しかし，そうした日本語リソースは万能ではなく，教師が自力で類義語を分析する必要も生じる。そこで，外部の日本語リソースに頼ることなく，もしくは部分的に頼りながらも，自力で分析して類義語の弁別の特徴を明らかにできることは，教師に必要な日本語力の一つといえる。

教師が主体的に類義語分析を行う場合，類義語のどのような特徴に目を向けるべきだろうか。類義語分析で焦点を当てるべき言語特徴については，日本語学習者の利用を想定した類義語辞典の記述方法が参考となるだろう。例えば『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（松井栄一編，小学館，2008年）では，類義語間に共通する「最も基本的な意味」に加え，各語特有の「語義」や「使い方」，使用時に含まれる「ニュアンス」が説明項目として取り上げられている。実際の記述を見ると，「ニュアンス」には文体差や評価性，フォーマリティなどが含まれているようである。以上のほかに，「表現例」の例文とともに「使われ方の違い」が示され，共起制限を含めた類義語の「使い分け」が説明されている。以上から，類義語分析に際して，教師はさまざまな観点から類義語の弁別の特徴を把握する必要のあることがわかる。

しかしながら，類義語が有するさまざまな言語特徴のなかでも，類義語指導の点からは特に意味特徴の重要性が指摘されている。例えば中道（2005）は，語彙指導の目的を「語が理解でき，使えるようになる」こととし，語の意味理解に関する注意点に「類義語の意味差」を挙げている。また倉持（1986）は，「類義語間の意味の異同を的確にとらえさせること」を語彙指導上の重要事項とする。以上のような指導上のニーズからすると，類義語分析において教師がより優先的に明らかにすべき特徴は，類義語の意味内容であるといえる。しかし，類義関係にある語は意味内容が全くの同一というわけではなく，部分的に共有しつつも互いに

弁別的な意味を持つという関係性が一般的である。そのため、類義語分析では意味内容を軽視することなく、その弁別性を明確化することが重要な目標となる。

以上のことから、意味内容を中心に類義語の弁別の特徴を明らかにし、それを明確に説明するための日本語力や日本語分析力が、教師には求められる。さらに、日本語教師養成においても、類義語分析に資する能力や技術の向上を促す指導が必要と考えられる。そうした問題意識から、本研究者はこれまで、教師の日本語分析技術向上に資するように、類義語分析ストラテジーのトレーニングと独習型教材の開発を進めてきた(坂口2009, 坂口・河野2010)。これは、分析技術の熟達度が低い日本語教育初学者や初心者教師を対象に、類義語分析を支えるストラテジーの意識化と習熟を促して分析技術の向上を目指すものである。トレーニングでは、“例文作成・例文分析・言語特徴分析”という類義語分析の下位行動を支えるストラテジーを扱い、それらの総合的な運用を求めている。このうち、例文の作成と分析に関わるストラテジーについてはその特徴と効果的な運用方法の検討が進んだものの、言語特徴分析のストラテジーについては現時点で十分に検討できていない状態にある。これまで言語特徴分析ストラテジーとしては、例文とその分析から得た情報を利用して類義語の特徴を明示的に説明する手続きを指導項目としてきた。しかし、言語特徴分析で類義語の弁別の特徴を見出すための具体的な手続きや、言語特徴の言語化に関わる手続きなどは明らかにできていない。よって、トレーニング内容の充実化には、類義語分析における実際の言語特徴分析行動を観察し、類義語の弁別の特徴を明示的に説明する手続きを詳細に把握することが急務である。類義語分析技術の熟達度が低い分析者は、どのような側面に焦点を当てて類義語の特徴を分析し、そしてそれをどのように説明するのだろうか。彼らの言語特徴分析の手続きと特徴説明の内容について、傾向や問題点を探る必要がある。そして、その成果を、ストラテジートレーニングでの指導項目とすべき言語特徴分析ストラテジーの把握に役立て、トレーニングの内容と構成を検討する手がかりを得る必要がある。

2. 研究目的

日本語教師養成講座の受講者が類義語分析において行う「言語特徴分析」を観察し、分析技術の熟達度が低い日本語母語話者が類義語の弁別の特徴を説明する手続きを明らかにする。具体的には、類義語に関する特徴説明を以下の二点から観察し、受講者が行っている言語特徴分析の特徴と問題点を探る。

- (1)言語特徴分析の焦点：どのような側面に焦点を当てて類義語の言語特徴を説明するか。
- (2)言語特徴分析の手続き：類義語の特徴をどのような形で説明するか。

3. 研究の手続き

3.1 研究手続きとそのねらい

言語特徴分析行動の特徴と問題点を探るためには、指導などによって分析行動やストラテジーが意識化されていない日本語母語話者の類義語分析を観察する必要がある。そこで本研究は、日本語教師養成講座において類義語分析ストラテジートレーニングを実施する前に、

日本語教育初学者である受講者（以下、被養成者）が行った類義語分析と、そこでの言語特徴分析に焦点を当てる。トレーニングでは例文の意識的な作成や分析を促すため、トレーニング実施後の被養成者が行う言語特徴分析は自然なものとはいえない。例えば、戦略が意識化されていない類義語分析過程では、例文が作られないまま言語特徴分析が行われる場合がある。よって、トレーニングを受けておらず類義語分析の戦略が意識化されていない被養成者に焦点を当て、彼らの言語特徴分析の内容と手続きを研究対象とする。そして、言語特徴分析行動を支える戦略について、類義語分析戦略トレーニングでの指導内容や指導方法を検討することを目指し、被養成者による言語特徴分析行動の実態を調査する。

3.2 類義語分析戦略トレーニングの実施と本研究のデータ

長野県内の日本語学校が実施する「基金訓練実践演習コース 日本語講師養成科」（全21週；開講期間2011年2月から同年7月）において、「類義表現・誤用分析」という科目（第19週から第21週で全5回；1回は50分授業を3コマ）を本研究者が担当し、類義語分析戦略のトレーニングを行った。被養成者（受講者）は非教師の日本語母語話者15名（男性5名・女性10名）で、当該科目の受講時、教育実習での指導項目分析や教案作成を通じ類義語分析を経験していたが、分析方法の指導は受けていない。

戦略トレーニングに先立ち、被養成者自身の無意識的な分析方法への理解と認識を促すことを目的に、類義語分析課題を課した。課題では、形容動詞「しんけん／ねっしん」と動詞「なでる／さする」の類義語ペアをそれぞれ10分間の制限時間で分析し、その結果をワークシートに記述する。分析への影響を避けるため、類義語はひらがな表記で提示した。A4版紙のワークシートには、課題に関する指示と記述欄が記載されている。指示部分は、「指示された2つの言葉について、違いがわかるように、それぞれの特徴を考えてください」という指示文と、ワークシートの使い方に関する説明で構成される。このワークシートに記述された類義語ペアに関する特徴説明から、類義語分析において被養成者が行った言語特徴分析の、内容と手続きを探る。

4. 結果と考察

被養成者15名による類義語ペア二組の言語特徴分析30例のうち、「しんけん／ねっしん」の分析2例と、「なでる／さする」の分析1例を除いた27例を本研究の検討対象とする。対象外とした分析例の一つは、制限時間内に「しんけん／ねっしん」の特徴説明をワークシートに記述できなかったケースである（被養成者N）。また、検討対象としない残りの二例は被養成者Bによるもので、類義語ペア二組ともベン図によって特徴が説明されていた。類義語分析課題では説明の形式について特別な指定をしていなかったが、本研究は言語による類義語の特徴説明を対象とし、図示のみでの特徴説明は扱わないこととする。なお、被養成者Bが図を用いて説明していた特徴は、類義語の共起制限であった。

以下、ワークシートに記述された類義語ペアの特徴説明から、被養成者14名による27例の言語特徴分析に見られる特徴や傾向を探る。特に、どのような側面に焦点を当てて類義語の

言語特徴が説明されているかという分析の焦点と、言語特徴がどのように説明されているかという分析手続きの二点に重点を置く。そして、類義語の弁別的特徴が明示的に説明されない、不十分な言語特徴分析となりうるケースを中心に取り上げる。なお、検討を進めるなかで提示する言語特徴分析の具体例には被養成者が記述した特徴説明の全文を挙げるが、紙面の都合上、レイアウトの変更を施す場合がある。

4.1 言語特徴分析において焦点化される類義語の特徴

言語特徴分析の目標は、類義語同士の相違点や弁別的特徴を明示的に説明することである。1で参照した類義語辞典の記述項目からわかるように、分析で焦点を当てるべき言語特徴にはさまざまなものがある。類義語分析課題において、類義語ペアのどのような言語特徴に焦点化するという選択は、被養成者に委ねられている。そうしたなか、ワークシートに記述された特徴説明からは、被養成者が意味内容に焦点化して類義語を分析する傾向が窺える。言語特徴分析において意味内容に着目しているケースは、全27例のうち24例であった（動詞ペアと形容動詞ペアで12例ずつ）。

例えば被養成者KとGによる「しんけん／ねっしん」の言語特徴分析では、両形容動詞の意味内容が説明されている。田ほか編（1998）によると、「しんけん」は「練習・遊び半分の気分でなく」ということを表し、「ねっしん」は「何事にも情熱を注ぎ夢中になる・一つのこと熱中する傾向があること」を表す。対してKの言語特徴分析では、「しんけん」に関する「まじめに取り組む態度」という説明と、「ねっしん」に関する「好きな事に対して夢中になっている様子」という説明が、各形容動詞の弁別的な意味内容を示唆している。一方のGによる分析では、「しんけん」に関して「ふざけていない、ちゅうとはんばでない」とした説明と、「ねっしん」に関して「気持ちを強くこめてとりくんでいるようす」とした説明が、両形容動詞の弁別性に関わるものと考えられる。

【例1】【しんけん】何かの物事に対して、まじめに取り組む態度。心構え。

【ねっしん】好きなこと・好きなものへ向かっている熱い気持ち。好きな事に対して夢中になっている様子。
(被養成者K)

【例2】【しんけん】ふざけていない、ちゅうとはんばでない、本物の気持ちである。まじめである。あとがない。まさに勝負である。

【ねっしん】いっしょうけんめいである。ねつを入れている。しんけんのような、あとがない気持ちはうすい。単に、気持ちを強くこめてとりくんでいるようすを表す。
(被養成者G)

上の二例では意味内容のみ説明されているが、一方で、主に用法に焦点化して類義語の特徴を説明するケースも見られる。被養成者Lによる「なでる／さする」の言語特徴分析では、両動詞の用法や評価性、共起制限が詳しく説明されている。その半面、意味内容への言及がほとんど見られず、両動詞が示す動作は明確に説明されていない。なお、例中の「／」は、ワークシートへの記述が当該部分で改行されていたことを示している。

【例3】【なでる】場所を問わず使う。せまい処、広い処にも使う。／必ずしもマイナスイメージの時に限らない。／対象者が年少者、子供にも使う。／軽いタッチのイメージがある。

【さ する】身体的な部分に使う。／面積的にせまい／マイナスイメージの語、使
 い方の後ろに多く使われる／年少者、子供にはあまり使わない／軽い
 とは限らない (被養成者L)

以上の三例は、類義語の意味もしくは用法のいずれかが重点的に説明されていた。しかし、用法中心の言語特徴分析は被養成者Lに見られるのみで、用法に関わる類義語の言語特徴は意味内容と併せて説明されるケースが多い。例えば被養成者Hは、「なでる／さする」の言語特徴分析において用法に焦点化し、各動詞が使用される状況を説明している。具体的には、「幼児に声かけする時」という「なでる」の説明と、「心地よい刺激を与える時」という「さする」の説明が該当する。一方で、分析対象語を説明に用いている点に不適切さはあるものの、「さする」が示す動作について「人体の痛む個所を手でさする」とし、意味内容を説明している。また、「なでる」については「親しみ、愛情を表現する意味で使われた」としており、意味と用法の双方に焦点が当たった形で特徴説明がなされている。

【例4】【な でる】手で頭をなでる、など、“かわいいね”と幼児に声かけする時に使わ
 れた。良い意味で頭をなでると親しみ、愛情を表現する意味で使われ
 た。

【さ する】イメージとして、体の調子の悪い時など、人体の痛む個所を手でさす
 る。心地よい刺激を与える時などに使う。 (被養成者H)

被養成者Gによる「なでる／さする」の言語特徴分析でも、意味と用法が併せて説明されている。Gは「なでる」について動作そのものと使用場面の両面に言及している一方で、「さする」については用法にのみ焦点化し、動詞が使用される状況と動作対象を説明している。また、「痛い部分をなでる場合に使う」という説明から、「さする」が示す動作を「なでる」と同一視していることが窺える。このことから両動詞の意味内容に違いを見出しにくく、「さする」については用法面から特徴を探っているものと考えられる。なお、両動詞の特徴説明に「～場合」という表現形式が見られ、動詞の使用場面に対する分析者の意識が窺える。

【例5】【な でる】主に、人をほめたり、愛情をもっていることを示したり、なぐさめたり
 する場合、体の部分をスキンシップとしてこすすることをさす。

【さ する】主に、人の体の痛みをとろうとして、痛い部分をなでる場合に使う。
 自分の体にも使うし、他人の体にも使う。 (被養成者G)

4.2 中心的な意味内容への焦点化が不十分な言語特徴分析

前節では、言語特徴分析において被養成者が類義語の意味内容に焦点化する傾向を見た。しかし、意味内容に焦点化した分析であっても、類義語が直接的に示す意味内容が必ずしも明確に説明されるわけではない。特に、被養成者の言語特徴分析には、類義語にとって本質的とは言えない、もしくは中心的とは言えない意味内容を説明している例が見られる。こうした分析は不正確とはいえないまでも、明らかにすべき意味内容が不明瞭なままとなる。例えば、被養成者Cは「なでる／さする」の言語特徴分析において、愛撫や症状緩和という行為目的に言及している。

【例6】【な でる】対象が愛しい、かわいいと思う時の愛撫するための行為。

【さ する】具合の悪い所や痛い所を治したり、症状を和らげるための行為。

(被養成者C)

松井編(2008)によると、「なでる」は「手の平や指の腹などを軽く当てて、対象をいとおしむようにゆっくり動かす動作」であり、「さする」は「手の平や指の腹を体に当てて軽く摩擦するような動作で、繰り返し動かす点に特徴があり、痛み・苦痛・こわばりなどを和らげるために行われる」。よって、Cが言及した両動詞が示す行為の目的とその違いは、弁別の特徴に関わるものといえる。その一方で、両動詞が示す動作自体にも弁別性があるものの、Cは「行為」と説明するにとどまっている。このようにCの言語特徴分析では、身体の動きや行為といった動詞としての本質的な意味内容が具体的に説明されておらず、弁別性が不明瞭である。行為の目的は的確に説明されているが、両動詞の弁別的な意味内容については分析の余地が残されている。

「なでる」の特徴として愛情に言及する被養成者は複数おり、被養成者Jの言語特徴分析でも同様の説明が見られる。「愛情表現」として手で軽く触れてする行為で「軽くさわること」というJの説明は、「なでる」の弁別性に関わる側面に言及している。しかしながら、この言語特徴分析では、説明に用いられた「触れる」や「さわる」という動詞との区別が問題となりうる。その点で、「なでる」が直接的に示す、特有の動作が十分に説明されているとはいいいく。一方の「さする」については、「摩擦」という説明が動きの反復性を示唆するものの、温めることは「さする」にとって中心的な意味内容とはいいいがたい。さらに、そうした行為の目的に関しては説明がなく、「なでる」との相違点が不明瞭である。

【例7】【なでる】軽く人物の表面を手で触れてする愛情表現。または軽くさわること。

【さする】体の一部に手を当てて摩擦して、あたためたりすること。

(被養成者J)

また、「しんけん／ねっしん」に関する被養成者Oの言語特徴分析では、各語特有の中心的な意味内容とは関係性の弱い側面が焦点化され、説明されている。「しんけん」に関する特徴説明においては、「前向きに」という部分と、「真心で」という部分が該当する。「真心」の有無は、「しんけん」が表す様子や態度にとって重要な要素ではなく、本質的な意味内容にも関わらない。同様に、物事を「前向きに」とらえることも本質的な意味内容にとっては重要度が低い要素といえる。また、「ねっしん」に関する「一生けん命」という特徴説明も、関連性のある意味と考えられるが、本質的で中心的な意味内容とはいいいがたい。むしろ「一生けん命」という態度を生む要因が、「ねっしん」の意味内容にとっては重要となろう。さらにいえば、この特徴説明では、「一生けん命」と「ねっしん」との類似性が問題となりうる。以上の点から、それぞれの形容動詞が直接的に示す本質的な意味内容からは焦点の逸れた言語特徴分析となっている。

【例8】【しんけん】物事を前向きにとらえて真心で行うこと。

【ねっしん】一つのことを一生けん命にする事。／心も体も一つの事に向けて行う。

(被養成者O)

4.3 類義語に関する簡潔な特徴説明

被養成者による言語特徴分析においては、類義語の意味内容が簡潔に説明される場合がある。そうした特徴説明の言語構造に着目すると、基本的に補語と述語、そして連用修飾語の

三語程度で構成されており、全体として形式名詞により名詞化することもある。例えば、被養成者Jによる「しんけん／ねっしん」の言語特徴分析では、各語の意味内容が短く簡潔に説明されており、説明を構成する言語要素も少ない。また、説明の要点である「一生懸命」と「真面目に」という部分は、それぞれ「しんけん」と「ねっしん」が表す様態を端的に示しているが、両形容動詞にとっての本質的な意味内容とはいいがたい。特に、「ねっしん」の特徴とした「真面目に」という様態は、「しんけん」の弁別性に関わる意味内容である。

【例9】【しんけん】一生懸命やること（真剣からきた話）

【ねっしん】真面目にとりくむ様 (被養成者J)

被養成者Jの例は類義語ペアいずれの特徴説明も簡潔なものだが、説明の簡潔さが類義語ペアによって異なる分析例もある。例えば被養成者Mの言語特徴分析では、「さする」に比べて「なでる」の特徴説明のほうが簡潔である。Mは「なでる」の動作を「さわる」と説明し、動作対象を「頭」としている。しかし、動詞「さわる」との区別が曖昧になりうる説明であり、さらには動作対象を頭としている点で限定的な特徴説明である。また、被養成者Iによる「しんけん／ねっしん」の言語特徴分析では、「ねっしん」の特徴説明のほうが言語要素も少なく簡潔である。「ねっしん」については、一つ事への集中と、「短期集中で」という時間の長さを指摘している。このうち前者は弁別性に関わる意味内容だが、後者は「ねっしん」にとっての中心的な意味内容ではない。説明の簡潔さもあり、結果的に弁別的な意味内容が明確になっていない。一方、「しんけん」の意味内容も時間の長さに着目して説明されているが、まじめさへの言及がある点で弁別的な意味内容が示されている。

【例10】【なでる】優しく頭をさわること

【さする】強い力で身体の一部を上下にさわること (被養成者M)

【例11】【しんけん】少し時間をかけるがまじめに物事を行う

【ねっしん】一つのことを短期集中で行う (被養成者I)

4.4 類義語ペアの対比に重点を置いた言語特徴分析

共通性や類似性が問題となる類義語を分析する場合、類義語同士を対比して弁別性を探ろうとする分析行動は妥当であり、自然なものだろう。実際に、複数の被養成者が言語特徴分析において任意の観点から類義語ペアを対比し、それぞれの特徴を説明している。例えば「なでる／さする」について、被養成者Dは動作の強弱という観点から、被養成者Iは触る範囲と手の往復回数という観点から対比し、類義語ペアの違いを説明している。このうち、両動詞の動作の軽さに関するDの説明と、「さする」の手の往復回数に関するIの説明は、ともに意味内容の弁別性に関わる指摘である。その一方で、両者の言語特徴分析は、両動詞の直接的な意味内容である動作や行為について説明が不明瞭である。特にDは両動詞の動作を同一視しており、Iの分析には動作自体に関する具体的な説明が見られない。

【例12】【なでる】同じ動作だけれど、そっと（弱く）の感じがする。

【さする】同じ動作だけれど、強・弱がある感じ。 (被養成者D)

【例13】【なでる】せまい範囲をさわる／手を1～2回往復させる

【さする】広い範囲をさわる／対象者が満足するまで手を往復させる (被養成者I)

言語特徴分析において対比が利用された場合、類義語ペアそれぞれの特徴説明には文構造や表現形式の重なりが認められる。例えば、Dによる説明は動作の強さを示す部分のみが、またIによる説明は範囲と往復回数を示す部分のみが類義語間で異なり、それ以外の部分は構造や表現が共通している。つまり、分析観点に関わる部分のみが異なる、「ミニマル・ペア」に似た形式の説明となっている点が特徴的である。

以上のように、対比に重点を置いた言語特徴分析では、同一の観点から類義語ペアの相違点が示される。しかし実際の分析では、類義語ペアのうちの一語について弁別の特徴を的確に説明できる観点であっても、もう一方の語の特徴説明には適さない場合がある。そのため、同一の観点から対比を行っても、それによって類義語ペア双方の弁別の特徴が明らかになるとはかぎらない。例えば被養成者Lによる「しんけん／ねっしん」の言語特徴分析では、表現形式の共通性からわかるように、「集中」の程度と「時間」の長さという二つの観点で類義語ペアが対比されている。

【例14】【しんけん】命がけの程全神経を集中して取り組む事。それにママ一心不乱で集中して取り組む事。時間の長短は問わない。

【ねっしん】普段より集中して物事に取り組む事。ある程度時間的に長く取り組む事。
(被養成者L)

対比の観点となっている集中度と時間的長さという特徴は、両形容動詞が示す状態に関わるが、「ねっしん」にとってより重要な意味内容といえる。「ねっしん」が示す集中度は物事への情熱や興味、関心といった心的態度に起因するものと考えられる。さらに、そうした態度での取り組み方は結果的に継続性が強いものとなり、その点で時間的長さに関わりうる。一方の「しんけん」は、物事に対する本気での取り組みやまじめさが本質的な意味内容である。そのため、「ねっしん」の場合に比べると集中度や時間的長さは関係性が弱く、「しんけん」の弁別性を明確化するには重要度が低い意味内容といえる。

また、被養成者Fは、意味と用法の両面に焦点化し、同一観点での対比によって「なでる／さする」の特徴を分析している。「なでる」については例文を挙げて使用される状況を説明するとともに動作内容に言及し、その説明を基に、手の動きの速さと動作対象の二点から対比して「さする」の特徴を説明している。このうち、自分か他人かという動作対象に関わる両動詞の違いと、「なでる」に関する「愛情」、そして「さする」に関する「ケガ」という点への指摘は、両動詞の弁別的な意味内容を示唆している。一方で、「さする」の示す動きが「すばやく」ない場合も現実的にはありうるため、その点で、動きの速さから対比した「さする」の特徴説明は限定的なものといえる。

【例15】【なでる】かわいがるとき、ほめるときに「頭をなでる」のように使い、あたたかい気持ちで込められている。ゆっくりと愛情などの思いをもって、ゆっくり手を左右に動かしている。自分に対してはあまりない。

【さする】なでるに比べ、すばやく手を左右に動かしさわっている。ケガをした部分など、心配しながら行うことが多い。自分に対しても人に対してもできる。
(被養成者F)

5. 考察

前節では、被養成者の類義語分析における言語特徴分析について、焦点化される言語特徴と分析手続きの面から観察し、その傾向を把握した。しかし、取り上げた言語特徴分析のパターンは、類義語ペアの弁別の特徴を明らかにするという目標が十分に達成されない可能性がある。本節では、そうした言語特徴分析の問題を整理しつつ検討し、その解決策となりうる言語特徴分析の手続きを併せて示すこととする。

第一に、言語特徴分析で焦点が当たる言語特徴に着目すると、被養成者は意味内容に焦点化して類義語の特徴を探る傾向がある。日本語学習者への類義語指導における意味特徴の重要性は先行研究で指摘されているが、同様に、被養成者の類義語分析においても意味重視の姿勢がうかがえる。しかし、意味内容に焦点化していても、それによって類義語の弁別性が必ずしも十分に説明されるわけではなく、説明の妥当性が低い場合がある。その要因としては、特徴説明の簡潔さと、中心的で本質的な部分から逸れた意味内容への言及が考えられる。このうち簡潔な説明は、少ない言語要素で説明が構成されるために情報量も少なく、結果として類義語特有の意味内容や相違点が不明瞭となる。一般的に日本語学習者に対する文法や語彙の指導では説明の簡潔さが重視されるが、類義語分析では簡潔さが同等に重要とはいえ、要点のみを示す説明では類義語特有の意味内容が明確になりにくい。そのため言語特徴分析では、類義語の意味内容を詳細かつ具体的に説明することも重要となる。分析観点に関わるもう一つの問題は、類義語の中心的で本質的な意味内容から乖離した特徴説明である。分析する類義語にとって重要度の低い側面が焦点化されると、弁別的な意味内容が明らかにならない。本研究で扱った「なでる／さする」と「しんけん／ねっしん」の場合は、各語が直接的に示す動作や行為、様態が中心的かつ本質的な意味内容となる。意味内容の中心性や本質さの判断は容易ではないが、類義語が直接的に示す事から意識的に探るという分析手続きが求められるだろう。

また、用法や使用場面に焦点化した言語特徴分析では、類義語ペアの意味内容が同一視されるか、もしくはまったく説明されない場合があり、意味内容の弁別性については不明瞭な特徴説明となりうる。一般的に、日本語でのコミュニケーションに対する日本語学習者の強いニーズもあり、日本語指導では言語項目の産出面を重視することが求められる。また、藤田（2000）は、日本語母語話者と同じ直感を持たない日本語学習者への語彙指導では「辞書的意味を与えるだけでなく、用法に関するシンプルな説明が必要」だと指摘する。以上の点をふまえると、教師や被養成者による類義語分析では、使用場面や使い分けの明示的説明は重要な位置を占めるといえる。現実的に、意味内容よりも用法に類義語の弁別性を求めるほうが、分析や説明が容易で効果的な場合もある。しかし、被養成者の言語特徴分析からは、用法への焦点化が意味内容とその弁別性の軽視につながるという可能性が指摘できる。そうした分析は、“意味は同じで使い方が異なるだけ”という教師や学習者の類義語理解の誘因ともなるだろう。よって、類義語分析において用法に焦点化する際には、類義語個々の意味内容についても弁別性を探るという姿勢を放棄しないよう留意すべきである。

第二に、被養成者による言語特徴分析の手続きに着目すると、同一観点からの対比によつ

て類義語ペアの差異を説明するという傾向が見られた。対比の利用は、類義語分析では重要で自然な手続きであるものの、同一観点によって類義語ペア双方の特徴が必ずしも的確に、等しく明らかにできるわけではない。一方の類義語の分析に有用な観点が、もう一方の類義語の分析には適さない場合もある。そのため、その類義語にとって重要度や弁別性の低い特徴が説明されるなど、対比の利用がかえって言語特徴分析の妥当性を低める可能性もある。また、対比に重点を置いた言語特徴分析では、特定の観点に縛られた限定的な特徴説明になりやすい。以上のような問題を、本研究では「対比のわな」と呼ぶ。例えば被養成者Kは、「なでる／さする」について、動きの範囲と手の往復回数という二点に着目して対比している。しかし、二つの観点からは把握できない動作や行為の側面には言及がなく、両動詞の本質的な意味内容が不明瞭な分析となっている。それに対して、被養成者Nも同様に往復回数の点から対比しているが、そのほかの観点からも両動詞を対比し、Kの分析よりも幅広く意味内容を探っている。特に、「愛情表現」と「いたわる」という「なでる」の説明と、「まさつ感」という「さする」の説明は、両動詞の弁別的な意味内容を示唆するものである。

【例16】【なでる】手で、物などのある範囲にわたって触ること。一往復くらい…。

【さする】手で物などを、何度も往復するように触り続けること（被養成者K）

【例17】【なでる】手のひらをあててやわらかく一方方向へ動かす。一回～複数回。愛情表現。いたわる。

【さする】指先や手のひらを当ててこする。手は往復する。まさつ感がある。なでるより弱めの力。複数回。（被養成者N）

対比に重点を置いた言語特徴分析では、限定的な分析にならぬよう、より多くの観点から多面的に類義語ペアの差異を探るとよいだろう。特定の観点からの対比に終始せず、その観点から離れたうえで、類義語ペア各語に特有の特徴を探るという手続きも重要となる。

6. まとめと今後の課題

本研究は、民間日本語学校の日本語教師養成コースにおいて行った類義語分析課題への回答から、被養成者14名の言語特徴分析27例を観察した。そして、焦点化される言語特徴と分析手続きの二点から、類義語ペアの特徴説明に見られる問題点を探り、その解決に必要な方策を示した。分析の焦点に関しては、類義語分析における被養成者の意味内容重視の姿勢を指摘した。しかし、意味内容が焦点化されても、弁別的な意味内容が必ずしも明確にされるわけではない。その要因として、本研究では説明の簡潔さと、中心的な意味内容への不十分な焦点化を挙げた。そこで言語特徴分析では、類義語が直接的に表す事象を重点的に探り、そこから類義語特有の意味内容を明らかにする姿勢が必要である。そして、要点を示すだけでなく、意味内容を詳細に説明することも重要な手続きである。第二に、分析手続きの面では、対比に重点を置いた言語特徴分析の傾向を指摘した。しかし、同一観点からの対比は類義語ペアの弁別の特徴の明確化に必ずしも効果的ではなく、結果として言語特徴分析の妥当性を低める可能性がある。したがって、多様な分析観点から多面的に言語特徴を探る姿勢や、対比に固執せずに類義語特有の特徴を個別に探る姿勢が求められる。

以上のような検討結果の一方で、類義語の意味説明に見られる不明瞭さや妥当性の低さが

何に起因するのかという問題は、十分に検討できなかった。要因として本研究で指摘した簡潔さに関しては、説明を構成する言語要素の数だけでなく、言語要素そのものについても検討が必要だろう。例えば、被養成者Aによる「ねっしん／しんけん」の言語特徴分析（例18）では、「ねっしん」に関する説明の中に「自画自賛」という表現が見られる。しかし、その表現の指示内容や意図は不明確で、分析者以外には正確な理解が困難と考えられる。そこで今後の研究では、特徴説明に用いられる用語や表現の理解の困難さを、分析者の説明意図を正確に把握したうえで検討する必要がある。そして、説明に用いた用語や表現の理解しやすさを分析者が客観的に判断する手続きと、必要に応じて理解が容易で明瞭な表現へと言い換える手続きを探っていくことが不可欠だろう。

〔例18〕物事に投入し、打ち込む様子を表している。

→自分のことについては真剣は使うが、熱心だと自画自賛になってしまう傾向がある。
（被養成者A）

また、類義語の中心的で本質的な意味への焦点化が不十分な分析に関しては、例文分析との関係性の把握が求められる。被養成者によっては例文を手がかりに言語特徴分析を行っていたことが、ワークシートへのメモ書きから窺える。よって、例文利用の有無による手続きの違いをふまえ、類義語の意味内容を見出して説明する過程と、中心的意味から焦点が逸れる過程を包括的に探る必要がある。さらに、類義語ペアの品詞特徴も、中心的な意味内容の明確化にとって重要な手がかりとなりうる。例えば形容動詞である「しんけん／ねっしん」にとって中心的で本質的な意味は動作や行為の様態であり、そこから意味内容を詳細化することで説明の妥当性が高められるだろう。本研究は、類義語の品詞特徴と言語特徴分析との関係を検討していない。よって、言語特徴分析において品詞特徴に着目することの有用性を探ることも、今後の課題の一つである。

本研究は、類義語の弁別的な意味内容を明示的に説明することが、被養成者にとって容易でないことを示した。本研究を基礎として調査と分析をさらに進め、類義語の弁別的な意味内容を的確かつ明示的に説明する手続きを明らかにする必要がある。そして、分析技術の熟達度が低い日本語教育初学者や初心者教師にとって習熟が求められる、言語特徴分析のストラテジーを把握することが、今後の課題と目標である。

付記

「基金訓練実践演習コース 日本語講師養成科」で用いたワークシートを本研究のデータとして使用することをご許可くださった受講生の皆様と、日本語学校関係各位に心より御礼申し上げます。なお、本研究の一部は、平成25年度日本学術振興会科学研究費助成事業〔基盤C；課題番号23520624；研究代表者・坂口和寛〕の助成を受けたものです。

引用文献・参考文献

- 藤田直也（2000）『日本語文法 学習者によくわかる教え方』アルク
姫野昌子（1998）「教える現場で直面すること」姫野昌子・小林幸江・金子比呂子・小宮千鶴子・

- 村田年『ここからはじまる日本語教育』 ひつじ書房
- 倉持保男（1986）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』Vol.5, No.9 明治書院
- 松井栄一編（2008）『ちがいがわかる類語使い分け辞典』 小学館
- 中道知子（2005）「語彙指導」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』 大修館書店
- 坂口和寛（2009）「日本語教師の日本語分析技術を養成するストラテジートレーニング—独習型教材の開発」小林ミナ・日比谷潤子編『日本語教育の過去・現在・未来 第5巻 文法』 凡人社
- 坂口和寛・河野俊之（2010）「日本語分析ストラテジーの独習型教材において疑似的インターアクションを生み出すインストラクション」『日本語教育方法研究会誌』Vol.17, No.1 日本語教育方法研究会
- 柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進・浅野百合子（1979）『ことばの意味2—辞書に書いてないこと』 平凡社
- 田忠魁・泉原省二・金相順編（1998）『日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する 類義語使い分け辞典』 研究社
- 大森雅美・鴻野豊子（2009）『ゴイタツ日本語教師をめざせ！』 アルク

（2013年10月31日受理，12月6日掲載）